

教職・保育職志望学生における大型絵本に関する体験と認識

Primary and nursery school trainees' practices and beliefs in reading large-size picture books

杉村 智子¹

SUGIMURA Tomoko

教職・保育職志望の大学1～4年生264名を対象として、幼少期の大型絵本にまつわる経験、現在の大型絵本との関わり、大型絵本の特徴の認識等に関する調査を行った。その結果、園に大型絵本が存在したこと、催物や図書館で読み聞かせてもらった経験、大型絵本がもつ独特の雰囲気等が想起された。また、現在の大型絵本を読む練習や読み聞かせの経験の頻度は、学年とともに多くなったが、実習時の大型絵本のエピソード事例は少数であった。大型絵本の特徴に関する全体的な認識は、通常サイズの絵本より読み聞かせが難しいが楽しく、子どもの興味や集中を促し、子どもがより楽しめるといったものであった。また、学年があがるほど、大型絵本での読み聞かせは難しいと考えていた。

目的

絵本は、幼児教育や保育の現場や家庭において言語発達の促進媒体として重要視されているだけでなく、子どもを含めた幅広い年齢層や地域におけるコミュニケーションツールとしての活用が推進されつつある。例えば、幼稚園教育要領（文部科学省、2017）の「言葉」のねらい及び内容として、「絵本や物語などに親しみ言葉に対する感覚を豊かにする」等の、絵本の活用に関する表記が複数箇所みられる。また、国立青少年教育振興機構では、2014年から絵本専門士、2019年から絵本専門士の前段階にあたる認定絵本士の養成を行っている。絵本専門士は、絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家であり、資格取得者には、絵本の可能性やその活用法を、学校や家庭のみならず地域社会全般に普及させる役割が期待されている。

絵本専門士委員会（2020）が作成した認定絵本士養成講座のテキストを概観すると、絵本には様々なジャンルが存在すること、読み聞かせや提示の方法・技術のバリエーション、絵本がもつ多くの可能性や有用性がみとれる。すなわち、絵本には、物語絵本、科学絵本、乳児向け絵本等の、様々なジャンルが存在し、その内容によって体系化がなされている。また、適切な絵本を選択して提示するための、施設やデータの活用技術や、ブックトークやおはなし会のテクニックには様々なものがある。さらに、心のケアが求められている場面での絵本活用や、大人の心を豊かにする絵本といったように、絵本は、多くの可能性を秘めたメディアであるといえる。

本研究では、絵本のメディアとしての可能性を考え、現在、出版はされているがほとんど研究対象とはなっていない「大型絵本」に焦点あてたい。杉村（2022）によると、「大型絵本」とは、文字通り大きなサイズの絵本のことで、日本では多数出版されているがその明確な定義は存在せず、大型絵本を所蔵する図書館では、例えば「大型絵本とは、一度に大勢の子どもたちを対象に読み聞かせをするために、作者の許可を得て拡大製作された絵本です（千葉県立中央図書館、2021）」というような説明がされている。また、大型絵本は、通常サイズの絵本と異なり、読み聞かせの方法論や環境設定に関する知見が構築されていないばかりではなく、保育・教育現場でどの程度活用されているのかも不明である。上述した、絵本専門士委員会（2020）のテキストにおいても、現在のところ、大型絵本というジャンルへの言及や解説はなされていない。

したがって本研究では、教職・保育職志望学生を対象として、大型絵本にまつわる幼少期の経験や、現在の大型絵本との関わりについて調査し、大型絵本の現状の一端を明らかにすることを目的とする。また、あわせて、教職・保育職志望学生が、通常サイズの絵本と比較した大型絵本の特徴をどのように認識しているのかについても検討を行う。

杉村（2022）は、日本で発行された277冊の大型絵本の調査を行い、大型絵本の分類や、発行年・

¹ 帝塚山大学 教育学部 教授

発行部数の推移を明らかにしている。まず、大型絵本は、先行して発行された通常サイズの絵本が拡大され発行されたもの（拡大絵本）と、通常サイズの絵本が存在せず最初から大型で発行されたもの（ビッグブック）の2種類に大別され、拡大絵本は236冊（85.2%）とその大半を占めていた。また、拡大絵本は、1994年に最初のものが発行された後、2002年までは年間5冊以下程度の発行数であったが、2003年から急激に発行数が増加し、2008年までの6年間は、毎年18～20冊が発行されていた。その間、ビッグブックは、1989年に最初のものが発行されて以来、年間の発行数は少なく、5冊以下で推移していた。

このことから、学生が幼少期に読み聞かせられたり、現在、実習等の現場で教材として扱った大型絵本は、ビッグブックではなく拡大絵本であることが推察されるが、学生が実際にどのような大型絵本に関する経験をしたのかは明らかになっておらず、この点を検討する必要がある。本研究では、誕生年が1999年から2003年である学生を調査対象とするが、これらの対象者が幼少期（5歳）となる年は、2004年から2009年であり、この時期は最初の拡大絵本が発行されてから10年後、また、拡大絵本の発行部数が増加していた時期である。したがって、拡大絵本が保育・教育現場に普及していたと考えられ、対象学生の幼少期の拡大絵本に関する体験についてのエピソード等を収集することが可能であろう。

また、本研究では、通常サイズの絵本に関しては、授業や実習で教材として利用する経験や読み聞かせの経験を有する、教職・保育職課程に在籍する大学生を対象とし、大型絵本との関わりや、大型絵本の特徴をどのように認識しているかについても検討する。調査対象とする学生は、1年生から4年生であり、1年生は保育実習や教育実習の経験がなく、2年生ではほとんどの学生が保育実習の経験を有する。また、3・4年生は、保育実習と、小学校または幼稚園での教育実習を経験している。よって、通常サイズの絵本と比較した場合の大型絵本の特徴についての認識が、学年等によって異なる可能性があり、この点についても検討する。

具体的な質問項目としては、学生の幼少期の大型絵本との関わりに関する質問として、大型絵本に触れた経験と所有（通っていた幼稚園等に大型絵本があった、等の3項目）、大型絵本を読み聞かせられたり自分で読んだ経験（通っていた幼稚園等で大型絵本の読み聞かせをしてもらったことがある、等の6項目）、現在の大型絵本との関わり（大型絵本を自分で読んだことがある、等の3項目）の、3種類を設定した。また、通常サイズの絵本と比較した大型絵本の特徴の認識については、「大型絵本のほうが読み聞かせをすることが難しい」等の5項目について、どの程度そう思うか4段階の評定を求めた。この他にも、幼稚園等にあった大型絵本の題名や、大型絵本に関連するエピソードについての自由記述を求めた。

方法

1. 調査対象者と調査方法

教育学部の保育・教職課程に在籍する1年生から4年生の264名を調査対象とした。表1は、調査対象者の属性を示したものである。調査への回答は、 Moodleベースのe-learningシステムの活動モジュールである、フィードバック機能を利用して収集した。事前に、大型絵本がどの程度大学生に馴染みのあるものかを調査するという目的と、回答は強制ではないことが伝えられた。また、大型絵本とは何かの説明（通常の絵本のサイズを縦横およそ50cmくらいに大型化した絵本であり、人気のある通常サイズの絵本が大型化されることが多いこと）も行われた。調査時期は2021年12月であった。

2. 調査内容

基本情報として、学年、誕生年、性別を尋ね、大型絵本についての質問項目は、(1) 大型絵本に触れた経験と所有、(2) 子どもの頃の、大型絵本を読み聞かせられたり自分で読んだ経験、(3) 現在の大型絵本との関わりについて、(4) 大型絵本の特徴認識について、の4種類に大別された。

表1 調査対象者の属性

	学年					性別			誕生年					
	1年	2年	3年	4年	合計	男性	女性	合計	1999	2000	2001	2002	2003	合計
人数	95	87	35	47	264	66	198	264	34	37	83	91	19	264
%	36.0	33.0	13.3	17.8	100.0	25.0	75.0	100.0	12.9	14.0	31.4	34.5	7.2	100.0

まず、(1) と (2) の下位質問項目（表 2 参照）については、“はい”、“いいえ”、“わからない”、のいずれかを選択するように求めた。また、(3) の下位質問項目（表 2 参照）については、はい、いいえ、のいずれかを選択するように求めた。なお、記述回答として、大型絵本に触れた経験と所有を尋ねる (1) の①～③の質問の少なくともひとつに“はい”と回答した場合、絵本の題名を思い出せた場合には題名を記述するように求めた。また、(2) の①～⑥の質問の後に、⑦子どもの頃の大絵本にまつわるエピソードについての自由記述を求めた。(3) の①～③の質問の後は、④現在の大絵本にまつわるエピソードについての自由記述を求めた。

(4) については、「通常サイズの絵本と比較した大絵本の特徴について、あなたの考えに近いものを選択して下さい」という教示のあと、5 つの下位項目（表 5 参照）についての評定を求めた。例えば、「①大絵本のほうが、読み聞かせをすることが難しい」について、“全くそう思わない”、“あまりそう思わない”、“そう思う”、“とてもそう思う”、のいずれかを選択するように求めた。

結果と考察

(1) 大絵本に触れた経験と所有

まず、幼稚園や保育園における大絵本の存在について、表 2 の (1) ①の回答から、26.5%の学生が通っていた園に大絵本があったことを記憶していることがわかる。“わからない”と回答した者が半数以上おり、実際に園が大絵本を所有していた割合はもう少し大きいと考えられるが、少なく見積もっても、4 園に 1 園は大絵本を所有していたことが推察される。これに対して表 2 の (1) ②や③の回答から、大絵本を所有している家庭は少数であることが明らかになった。

表 3 は、園等にあった大絵本の題名を思い出せた場合の記述結果である。32 名の学生が題名を記述しており、23 名が 1 事例、7 名が 2 事例、1 名が 3 事例、1 名が 5 事例の記述を行っていたため、全部で 45 事例となった。表 3 は挙げられた事例の度数が多い書名順に記述されている。上位 3 冊は、はらぺこあおむし (1994)、おおきなかぶ (1998)、ぐりとぐら (1995) であった。いずれも拡大絵本が発行されるようになった初期のものであり、調査対象学生が幼稚園・保育園に在籍する 2000 年初頭以降には多く普及していたと考えられる。4 位以降は、度数が 2 または 1 であり、1 冊を除いて 2000 年以降に発行されたものであった。杉村 (2022) は、大絵本を 2 種類に分類し、先行して発行された通常サイズの絵本が拡大され発行されたものを「拡大絵本」とし、通常サイズの絵本が存在せず最初

表 2 大絵本の体験に関する質問項目と回答

質問項目	回答選択肢		
	はい	いいえ	わからない
(1) 大絵本に触れた経験と所有			
①自分が通っていた幼稚園や保育園等には大絵本があった	70 (26.5)	44 (16.7)	150 (56.8)
②子どもの頃、自宅に大絵本があった	6 (2.3)	233 (88.2)	25 (9.5)
③現在、大絵本が自宅等にある	3 (1.1)	248 (93.9)	13 (4.9)
(2) 子どもの頃の、大絵本を読み聞かせられたり自分で読んだ経験			
①自分が通っていた幼稚園や保育園等で、大絵本の読み聞かせをしてもらったことがある	107 (40.5)	40 (15.2)	117 (44.3)
②子どもの頃、何かの会や催しもので、大絵本の読み聞かせをもらったことがある	123 (46.6)	43 (16.3)	98 (37.1)
③子どもの頃、自宅で、保護者等から大絵本の読み聞かせをもらったことがある	14 (5.3)	193 (73.1)	57 (21.6)
④自分が通っていた幼稚園や保育園等で、自分で大絵本を読んだことがある	35 (13.3)	131 (49.6)	98 (37.1)
⑤子どもの頃、自宅で、自分で大絵本を読んだことがある	10 (3.8)	207 (78.4)	47 (17.8)
⑥子どもの頃、図書館等で、自分で大絵本を読んだことがある	53 (20.1)	155 (58.7)	56 (21.2)
(3) 現在の大絵本との関わりについて			
①大絵本を自分で読んだことがある	95 (36.0)	169 (64.0)	—
②大絵本の読み聞かせの練習をしたことがある	48 (18.2)	216 (81.8)	—
③子どもの前で大絵本の読み聞かせをしたことがある	36 (13.6)	228 (86.4)	—

数値は人数、括弧内は%を表す
いずれの質問項目も、合計は264名

から大型で発行されたものを「ビッグブック」と定義している。杉村（2022）の調査によると日本で発行されているのは「拡大絵本」が大多数であった。今回、学生が想起・記述した大型絵本の題名は、すべて拡大絵本であり、学生が幼少期に触れた大型絵本は、拡大絵本のほうであった可能性が高いといえる。

（2）子どもの頃の大型絵本にまつわる経験

まず、大型絵本の読み聞かせをしてもらった経験について、表2の（2）①、②の回答から、4割程度の学生が幼稚園や保育園、催し物等での読み聞かせの体験を記憶しており、園よりも催し物等での記憶が若干上回っていることがわかる。また、家庭で読み聞かせをしてもらった経験はほとんどなく、これは、上述したように、家庭では大型絵本がほとんど所有されていないことに起因しているだろう。次に、自らが大型絵本を読んだ経験については、図書館で読んだことを記憶している学生が2割程度であり、幼稚園や保育園での経験を記憶している学生よりも多かった。以上のことから、幼稚園や保育園等よりも、催し物や図書館での経験が多く記憶されていることがわかる。

表4-1は、子どもの頃の大型絵本にまつわるエピソードについて自由記述を行わせた回答例である。エピソードを記述した人数は29名で、29事例のエピソードを4種類に分類した結果、図書館でのエピソードが一番多く記述され、次いで、学校等でのエピソードと大型絵本の印象が記述された。すなわち、上述した、読み聞かせや自分で読んだ経験への回答と同様、園や学校以外の場所、すなわち図書

表3 通園していた園に存在した拡大絵本

書名	出版年	度数	書名	出版年	度数
はらぺこあおむし	1994	18	そらめくんのベッド	2001	1
おおきなかぶ	1998	12	おばけのてんぷら	2003	1
ぐりとぐら	1995	4	きんぎょがにげた	2009	1
だるまさんが	2010	2	100かいだてのいえ	2009	1
三びきのやぎのがらがらどん	2016	2	ちか100かいだてのいえ	2010	1
ぐるんぱのようちえん	1999	1	パパ、お月さまとって!	2015	1

表4-1 子どもの頃の大型絵本にまつわるエピソード例

内容	事例数
図書館でのエピソード	11
図書館に行って大きいからと言ってわくわくしながら、読んでいた。なにか、普通サイズの絵本と違う気持ちになっていた。	
図書館で大型絵本でぐりとぐらを読んだ記憶があります。絵が大きいので絵本に出てくるパンケーキなどが美味しそうだなと感じていました。	
図書館には大型絵本があったので、楽しみに図書館へ行って読んでいた記憶があります。大きいから持って帰るのが大変だった印象があります。	
学校等でのエピソード	8
小学生の頃に乳幼児が集まる施設のボランティアで読み聞かせをしていて、自分で読むのも好きだった。	
小学校の図書室に大型絵本が5冊6冊ほど並んでいたのは覚えています。おばけの天ぷらの話の大型絵本をよく読んでいました。	
あまり詳しい内容は覚えていないが、幼稚園の催しで、大型絵本を保育士が読み聞かせしてくれたことを覚えている。	
大型絵本の印象について	8
普段の絵本よりも大きくて絵が見やすいと思っていた。	
自分の体より大きい絵本を読むときはとても楽しかった。	
大きいな、なぜこんなに大きいのだろうという印象を持っていた。	
大きいので、視界全部が絵本になって物語に入り込めた。	
その他のエピソード	2
地域の歴史みたいなものを大型絵本で紹介していたのを覚えている。	
読もうと思ったら表紙とページがビリビリに破れていた。	
合計	29

館での催物のエピソードが多く記述されていたといえる。このことは、園や学校での大型絵本を介した活動が実際に少なかったことを示すのではなく、毎日通う園や学校以外での特殊な経験として、図書館等での出来事が想起されやすかったことにも起因するのかもしれない。しかし、大型絵本の蔵書を豊富に有している地域の図書館も多く、例えば、佐倉市立佐倉南図書館（2019）は、蔵書リストだけでなく読み聞かせ方法のマニュアルも公開している。これに対して、保育・教育現場では、日常の保育や教育で用いる教材としては、大型絵本は馴染みのないものであったと考えられる。

エピソードの記述において、“大きいからわくわくしながら”，“絵が大きいのでパンケーキが美味しそう”，“自分の体より大きい絵本は楽しい”，“視界全部が絵本になって物語に入り込めた”といった、肯定的な印象を表す記述がみられた。このことは、通常サイズの絵本を読み聞かせてもらう時とは違う場の雰囲気や、大きい絵がもつ独特の世界観を、当時感じていたことを示している。しかし、エピソード記述の事例数も多くなく、幼少時のエピソードの回想であるので、大型絵本に対する印象や感情については、直接的に幼児や小学生を対象として検討を行う必要があるだろう。

（3）現在の大型絵本との関わり

まず、現在の大型絵本との関わりについて、表2の（3）の回答から、①自分で読んだことがある者は全体の36%であり、②読み聞かせの練習をしたことがある者はその半数の18%、③子どもの前で読み聞かせをしたことがある者は②より少ない13%であった。本調査の対象となった教職・保育職志望学生は、通常サイズの絵本については、ほぼ全員が授業において読み聞かせの演習を行う。しかし、大型絵本については、授業には組み入れられておらず、課外の活動として経験した者だけに限られるために、読み聞かせの練習をしたり、実際に読みみかせを行ったりした者は2割に満たなかったと考えられる。

また、①～③の大型絵本との関わりの経験の頻度が性別や学年によって異なるか、すなわち、回答（はい・いいえ）の、性別や学年による頻度の違いを検討するために χ^2 検定を行った。分析は、統計分析ソフトHAD（清水，2016）を使用した。なお、以降の統計的分析についても、このソフトを使用した。まず、性別による回答の違いは①～③のいずれの項目においてもみられなかった。従って、大型絵本を読む練習をしたり読み聞かせたりする経験の多さは、性別による差はないといえる。次に、学年による回答の違いを検討したところ、①～③の全ての項目で有意差が確認された（①： $\chi^2 = 10.20$ ，②： $\chi^2 = 21.25$ ，③： $\chi^2 = 32.99$ ， $df = 2$ ， $p < .01$ ）。残差分析の結果、1年生は②と③で、“いいえ”の回答が有意に多く、“はい”の回答が有意に少なかった（いずれも $p < .01$ ）。2年生は③で、“いいえ”の回答が有意に多く、“はい”の回答が有意に少なかった（いずれも $p < .01$ ）。3・4年生は①～③の全ての項目で、“はい”の回答が有意に多く、“いいえ”の回答が有意に少なかった（いずれも p

表4-2 現在の大型絵本にまつわるエピソード例

内容	事例数
保育実習・教育実習	10
保育園実習でおばけのてんぷらを読み聞かせして、扱いづらいように感じたが、大人数の子どもに読み聞かせるとかに有効であると感じた。	
幼稚園実習に行かせていただいた際に園の中にある図書室で大型絵本を子どもたちに読み聞かせを行いました。	
大学のゼミや学祭	7
ゼミで大型絵本に触れる機会があり、1人で持って読み聞かせを行うことは難しく2.3人で大人に向けて読み聞かせを行った。また、大型絵本の台を用いることで1人でも読むことができた。	
学祭で大型絵本の読み聞かせをさせて頂きました。	
高校以前の活動	6
読み語りボランティアという高校生が小学校に行き読み聞かせをする取り組みで、準備段階で大型絵本を練習しました。	
高校生の頃に大型絵本を読み聞かせをしてもすごく見やすく読みやすく、伝わりやすかった。	
その他のエピソード	1
甥たちと図書館へ行くと大きく目立ちやすいため、すぐに飛びついていた	
合計	24

く.01)。 χ^2 検定の結果から、大型絵本を読む練習をしたり読み聞かせたりする経験の頻度は、学年が上がるとともに多くなり、とくに3・4年生で多くなっていた。これは、教職・保育職志望学生は3年の後期までに複数の実習を経験していることが要因のひとつとしてあげられるだろう。

表4-2は、現在の大型絵本にまつわるエピソードについて自由記述を行わせた回答例である。エピソードを記述した人数は24名で、24事例のエピソードを4種類に分類し結果、実習でのエピソードが一番多く記述され、次いで、大学のゼミや学祭、高校以前のエピソード、その他、であった。今回の調査対象となった2年生以上の171名は、ほとんどの者が保育実習や教育実習を経験しているが、実習時の大型絵本にまつわるエピソードは10事例と少数であり、上述したように、教育教材として用いられている頻度は低いことが推察される。

(4) 大型絵本の特徴の認識

表5は、①から⑤の、通常サイズの絵本と比較した大型絵本の特徴について尋ねる質問の回答について、“全くそう思わない”を0点、“あまりそう思わない”を1点、“そう思う”を2点、“とてもそう思う”を3点とし、全体の平均値と標準偏差、また、学年と性別ごとの平均値と標準偏差を示したものである。得点が高くなるほど、その項目に対して、そう思うと認識していることになる。まず、全体の平均値について、1.5点を基準値として1サンプルの t 検定を行ったところ、①から⑤まで全てにおいて基準値より有意に得点が高いことが明らかになった(順に、 $t = 6.720, 10.86, 24.05, 14.69, 18.73, df = 263, p < .01$)。すなわち、全体的に、大型絵本の特徴を通常サイズの絵本と比較すると、読み聞かせをすることは難しいが楽しく、子どもの興味や集中を促し、子どもがより楽しめると認識していることが明らかになった。

また、学年や性別、質問項目の種類によって得点に差がみられるかを検討するために、性別2(男性、女性)×学年3(1年、2年、3・4年)×質問項目の種類5(①～⑤)の分散分析を行った。性別と学年は調査者間要因、質問項目の種類は調査者内要因であった。その結果、まず、性別の主効果が有意であり($F_{(1, 258)} = 12.03$, 偏 $\eta^2 = .045, p < .01$)、5つの項目における単純主効果検定の結果、全ての項目で女性が男性よりも得点が高いことが明らかになった(①④: $p < .01$, ②③⑤: $p < .05$)。また、質問項目の種類の主効果が有意であり($F_{(4, 1032)} = 48.42$, 偏 $\eta^2 = .158, p < .01$)、多重比較の結果、①<②<④<⑤<③の順に、得点が高くなることが明らかになった。学年の主効果は有意ではなかったが、学年と質問項目の交互作用が有意であり($F_{(8, 1032)} = 4.39$, 偏 $\eta^2 = .033, p < .01$)、項目①のみで単純主効果が有意であった($p < .01$)。多重比較の結果、1年生は、2年生と3・4年生よりも有意に得点が低く(両者共に $p < .01$)、2年生と3・4年生の間に差はみられなかった。

表5 大型絵本の特徴認識についての学年差と性差

質問項目	全体		性別		学年			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
①大型絵本のほうが、読み聞かせ をすることが難しい	1.77	0.66	男性	1.61	0.68	1年生	1.56	0.77
			女性	1.83	0.65	2年生	1.94	0.56
						3・4年生	1.84	0.55
②大型絵本のほうが、読み聞かせ をすることが楽しい	1.92	0.62	男性	1.76	0.70	1年生	2.02	0.62
			女性	1.97	0.59	2年生	1.87	0.59
						3・4年生	1.84	0.66
③大型絵本のほうが、子どもの本 への興味をひくことができる	2.42	0.62	男性	2.26	0.73	1年生	2.51	0.54
			女性	2.48	0.58	2年生	2.37	0.68
						3・4年生	2.39	0.64
④大型絵本のほうが、子どもがお 話に集中しやすい	2.12	0.69	男性	1.92	0.73	1年生	2.21	0.65
			女性	2.19	0.66	2年生	2.10	0.73
						3・4年生	2.04	0.67
⑤大型絵本のほうが、子どもが楽 しむことができる	2.24	0.64	男性	2.11	0.68	1年生	2.31	0.60
			女性	2.28	0.62	2年生	2.26	0.66
						3・4年生	2.13	0.66
			男性 66名、女性 198名		1年生 95名、2年生 87名 3・4年生 82名			

分散分析の結果から、まず、男性よりも女性のほうが、大型絵本は読み聞かせをすることは難しいが楽しく、通常サイズの絵本よりも、子どもの興味や集中を促し子どもがより楽しめると考えていることが明らかになった。また、全体的に、項目間の差で特徴的なことは、大型絵本のほうが子どもの興味を引くことができ、子どもも楽しむことができるとより考える傾向にあった。学年による差としては、1年生よりも、2年生と3・4年生の方が、大型絵本の方が読み聞かせをすることが難しいと考えていることが明らかになった。

このように、性別や学年によって、通常サイズの絵本と比較した大型絵本の認識の差異には、大型絵本に触れる経験や実際に子どもと接する経験等の差が影響している可能性がある。まず、学年差として、2年生以上の学生が1年生よりも読み聞かせの難しさを認識しているのは、(3)で示されたように、学年があがると読む練習をしたり読み聞かせたりする経験の頻度が多くなることが理由の一つであると考えられる。また、保育実習や教育実習を経験し、子どもの前で読み聞かせを行う具体的なイメージと照らし合わせて判断した結果であるともいえるであろう。

しかし、性別によって認識の差が生じる理由については本研究からでは明らかにできない。その理由は、(3)で示されたように、大型絵本を読む練習をしたり読み聞かせたりする経験の多さは、性別による差はみられないからである。女性のほうが、大型絵本について、読み聞かせをすることは難しいが楽しく、通常サイズの絵本よりも子どもの興味や集中を促し子どもがより楽しめると評価する理由については、今後検討する必要があるだろう。

まとめと今後の課題

本研究は、教職・保育職志望学生を対象として調査を行い、大型絵本に関する幼少期の経験や、現在の大型絵本との関わりや認識を明らかにすることを目的とした。まず、学生の幼少期の体験の回答から、幼稚園や保育園では、少なくとも4園に1園は大型絵本を所有していたことや、家庭ではほとんど所有されていなかったことが推察された。また、幼稚園や保育園等よりも、催物や図書館において読み聞かせてもらった経験が多く、エピソードの記述から、通常サイズの絵本の読み聞かせとは異なる場の雰囲気や、大きい絵がもつ独特の世界観を体験していたことが読み取れた。また、現在の大型絵本との関わりへの回答から、自分で読んだことがある者は全体の36%で、読み聞かせの練習をしたことがある者は18%、子どもの前で読み聞かせをしたことがある者は13%であった。大型絵本を読む練習をしたり読み聞かせたりする経験の頻度は、学年が上がるるとともに多くなり、とくに3・4年生で多くなっていた。実習時の大型絵本にまつわるエピソード事例は少数で、保育・教育教材として用いられている頻度は低いことが推察された。

大型絵本の特徴に関する全体的な認識は、通常サイズの絵本と比較すると読み聞かせをすることは難しいが楽しく、子どもの興味や集中を促し、子どもがより楽しめるといったものであった。また、1年生よりも、2年生と3・4年生の方が、大型絵本の方が読み聞かせをすることが難しいと考えており、男性よりも女性のほうが、読み聞かせをすることは難しいが楽しく、通常サイズの絵本よりも子どもの興味や集中を促し子どもがより楽しめると考えていた。学年による認識の差異は、大型絵本に触れたり子どもと接する経験の差が影響している可能性があったが、性別による認識の差異の原因は推察することが困難であった。

今後の課題としては、以下の2つが考えられる。1つめとして、実際の保育・教育現場で、大型絵本がどの程度普及し、保育や教育に活用されているのかを明らかにすることである。今回は、学生が幼少期の体験を想起した情報をもとに現状を推察することにとどまったが、保育・教育現場での現状を把握する調査研究が必要であろう。2つめは、大型絵本の活用技術の開発に関する研究成果を構築していくことである。大型絵本の読み聞かせ活動は、図書館等での催しでも行われており、マニュアル等も存在する。それらを集約して読み聞かせ方の方法や技術を体系化していくことや、それらが有効な方法であるか等についての検証を行っていくことも必要であろう。

引用文献

絵本専門士委員会 (2020) 認定絵本士養成講座 テキスト 中央法規出版
アレクセイ・トルストイ (1998). おおきななぐ 内田莉沙子 (訳)・佐藤忠良 (絵) 福音館書店

エリック・カール (1994). はらぺこあおむし もりひさし(訳) 偕成社
 エリック・カール (2015). パパ、お月さまとって! もりひさし(訳) 偕成社
 五味太郎 (2009). きんぎょがにげた 福音館書店
 岩井俊雄 (2010). ちか 100 かいだてのいえ 偕成社
 岩井俊雄 (2009). 100 かいだてのいえ 偕成社
 かがくいひろし (2010). だるまさんが ブロンズ新社
 マーシャ・ブラウン (2016). 三びきのやぎのがらがらどん せたていじ(訳) 福音館書店
 西内ミナミ・堀内誠一 (1999). ぐるんぱのようちえん 福音館書店
 中川李枝子・大村百合子 (1995). ぐりとぐら 福音館書店
 なかやみわ (2001). そらまめくんのベッド 福音館書店
 文部科学省 (2001). 幼稚園教育要領 フレーベル館
 佐倉市立佐倉南図書館 (2019). 佐倉南図書館所蔵 大型絵本ブックガイド 8 訂版
<https://www.library.city.sakura.lg.jp/viewer/info.html?id=315> (閲覧日: 2023.1.22)
 杉村智子 (2002). 日本における大型絵本の現状分析 帝塚山大学子育て支援センター紀要, 3, 46-52.
 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育 研究実践における利用方法の提
 案, メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
 せなけいこ (2003). おばけのてんぷら ポプラ社
 千葉県立中央図書館 (2021). 千葉県立中央図書館 児童資料室 大型絵本リスト
<https://www.library.pref.chiba.lg.jp/kids/dl/oogataehon.html> (閲覧日: 2023.1.30)